

KAAT若手舞踊公演「SUGATA」

記者懇親会レポート

2011年のオープン以来、神奈川芸術劇場が続けている「KAAT次世代への古典芸能プロジェクト」。これまで、杉本文楽や花柳壽輔「隅田川二題」、竹本駒之助公演などを上演してきましたが、このたび若手舞踊公演「SUGATA」が新たに誕生致します。

「SUGATA」という公演名には、瑞々しい若手の今の姿をご覧いただき、また、演者自身にも、諸先輩の姿を目に焼きつけてほしいとの意味が込められています。

今回は、藤間流宗家・藤間勘十郎作・演出・振付の、清元・長唄による新作舞踊劇『葛城山蜘蛛糸譚』に、中村鷹之資と中村玉太郎が挑みます。公演に先立って開かれた、勘十郎と鷹之資と玉太郎による記者懇親会のもようをお届けします。

取材・文=高橋彩子

——今回、新作ということですが、題材や配役の理由をお教えいただけますか？

勘十郎：最初は古典という話もあったのですが、いつもと違うKAAT大スタジオの空間で、今の鷹之資くんと玉太郎くんに合うものということで、新作に致しました。神奈川県足柄山も舞台に取り入れ、土蜘蛛退治のお話を中心しつつ、『山姥』『紅葉狩』『戻橋』など様々な趣向を詰め込みます。金時は四天王の中でも若くて力持ち。鷹之資くんのイメージと重なりますし、お父様の天王寺屋さん（富十郎）もなされた役です。天王寺屋さんには私も大変お世話になりました。

（資真）の襲名時には口上を述べていただきましたし、私が初めて振付を担当したのも天王寺屋さんでした。今回は金時の母である山姥と、童子実は土蜘蛛の精の2役を私が勤め、“子別れ”の見せ場も作ろうと考えています。また、玉太郎さんには山神をやってもらいます。歌舞伎俳優にとっても私ども舞踊家にとっても憧れの役である『紅葉狩』の山神を踊れる役者になってもらいたい、という思いで作りました。



玉太郎さんは私の親戚にあたりますが、玉太郎さんのお祖父さまにあたる東蔵の叔父は私が新作を作るたびに観に来てくれ、色々ご助言をくださいますので、その恩返しの気持ちもございます。親戚の中で唯一の若手ですので、頑張ってもらいたいと思います。踊りのうまい方が沢山いなくなってしまわれたという悲しい現実の中で、いつか大きな舞台できちんと踊れる歌舞伎役者になってほしいと願って配役致しました。

鷹之資：勘十郎先生がくださったチャンスなので、精一杯頑張ります。金時は活発な役ですから、そう見えるよう元気よく踊りたいです。

玉太郎：山神は、亡くなった（中村）勘三郎さんや（坂東）三津五郎さんもなされた凄い役。少しでも近づけたらと思います。

——鷹之資さん、玉太郎さんにとって、踊りはどんな存在ですか？

鷹之資：昔から踊りは好きでしたが、4年前に父が亡くなり、改めて、もっと努力しなければならないなと思いました。僕が小さかったので、父からは細かいことは言われなかったのですが、とにかく手を綺麗に、そして目を輝かせて思いきり踊るようにと言われたのをおぼえています。父が亡くなってすぐは、なぜもっと色々なことを教えてくれなかったんだろうと思いましたけれども、色々な方の踊りを観て、自分でもお稽古をして、やはり踊りはうまくやるというよりも、丁寧に手を伸ばすとか目を輝かせるといったことが大事なんじゃないかなと実感しています。その上で技術を勉強していければと考えています。父の踊りも長い年月をかけて完成させたものなので、僕も今の時期に基礎を固め、ゆくゆくは父以上にうまくなれるよう、気を引き締めています。

玉太郎：小さい頃からずっとやっていますので、踊りは身近な大切な存在です。この公演でお客様に、上手になってきていることをお見せできたらと思っています。もちろん、細かい動きや綺麗さも大事なのですが、歌舞伎役者ですので、何よりもやはりその役らしく踊りたい。今回は山神の力強さや雄大さを出したいです。

——勘十郎さんは鷹之資さんと玉太郎さんの舞踊の師匠であり、今回は振付をなさるわけですが、踊り手としてのお二人をどうぞ覧になられているのでしょうか？

勘十郎：今の彼らは、スタート地点に立つか立たないかというところ。今後のためにも、きちっとしたものを習得して一生懸命やってくれればいいのではないかなと思います。私の曾祖母（初世藤間勘祖）は六代目尾上菊五郎の師匠で、いわば一緒に「六代目菊五郎」という存在を作り、祖父（二世藤間勘祖）は十八世中村勘三郎という人を育て上げました。僕も誰かを育てていかなければならないと考えています。鷹之資くんと玉太郎くんはもともと母（三世藤間勘祖）が教えていたので、僕はもしかしたらそのお子さん達を踊りの名手にしていかなければならないのかもしれないかもしれません。

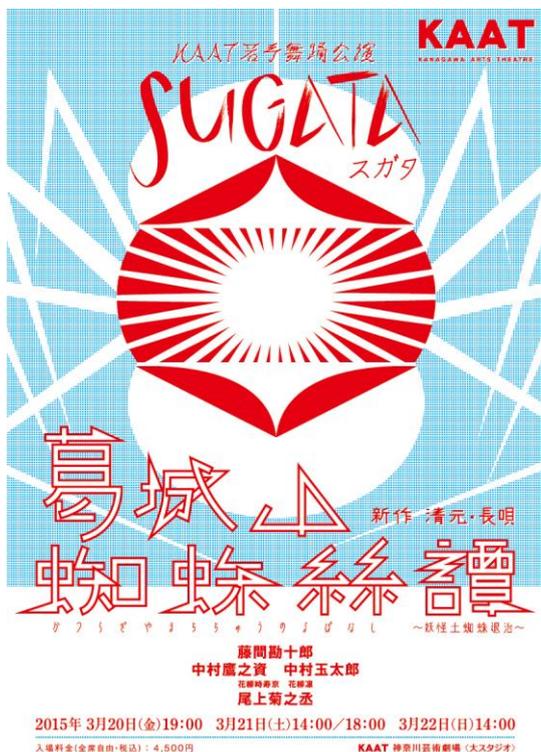
ともあれ、歌舞伎役者は舞踊家ではないので、歌舞伎の踊りの人になってもらわないといけない、というのが根底にございますが、鷹之資くんのお父様の天王寺屋さんを思い出しても、何をやっても踊りとしても面白く、かつその役に見えるというのが一番です。今回、メッキで周りを塗り固めるつもりはないので、まずは粗があってもしっかりと踊り、どんどん研ぎ澄まして綺麗になっていってほしいですね。人が少ない世代ですので、こうした舞台をバネにどんどん出て行ってもらわないと困ります。



—KAATのスタジオは、黒が基調の近代的な空間です。

勘十郎：あの空間に合わせるためにも、現代的な照明になると思います。基本的に紋付袴での素踊りですが、黒い空間に黒い着物が映えることもありますし、黒色が同化していくのが面白かったり、そこから白い蜘蛛の糸が出て来るのが効果的に見えたりということもあります。そこはこれから、工夫をしていきたいですね。こうした空間で踊ることは、私達舞踊家にとってもそうないことですから、いつもご一緒させていただいている尾上菊之丞さんにもご出演賜りまして、どう見えるか考えて作っていきたいと考えております。

—鷹之資さんと玉太郎さんにとって、こうしたコンパクトな舞台は新鮮なのではないでしょうか。観客にどんなものを届けたいですか？



鷹之資：今回のように、お客様の息遣いが聞こえるか聞こえないかというくらい距離が近い舞台は初めてなので、緊張もありますが、ワクワクしています。お客様にも新たな見方で楽しみいただけたらと思いますし、そうなるよう勤めたいです。僕の同年代の友達も、伝統芸能をよく知らない人でも、観ると「面白かった」と言ってくれます。今回は新作で前例がないものなので、のちのち「あれを観てよかった」と言ってもらえるようにしたいです。

玉太郎：様々なお芝居の要素を取り入れていますので、観たことがある方には「あ、ここは〇〇に似ているな」ということを感じていただきたいですし、普段、伝統芸能をあまり観ない方には「歌舞伎の舞踊ってこういうものなんだ！」と楽しんでいただけるようにしたいと思います。

—お二人は普段、お稽古以外にどんなものがお好きなのでしょうか？ 他の舞台などを観に行かれたりもしますか？

鷹之資：他の舞台や映画など色々なものを観ようと思っています。まだ公開されていないのですが、この間、山田洋次監督の映画にも出させていただきました。声はそんなに大きく出さなくてもいいけれど細かい演技が必要だったり、歌舞伎とは作り方も演出も違いましたが、何かを伝える気持ちは一緒ですし、言葉で言わなくても雰囲気やちょっとした動きで感情を表さなければならないところは踊りに通じます。

玉太郎：僕は趣味と言えるものはあまりないんですけども、亀子というギリシャリクガメを飼っています。

鷹之資：玉太郎くんはマイケル・ジャクソンが好きで、将来はマイケルのような役者になりたいそうです。楽しみですよ。

玉太郎：はい。2～3歳のころ、親の影響でハマって、真似をしたりしていたのですが、最近、久しぶりに聴いたらやっぱりいいなとまたハマり出しまして。『Smooth Criminal』など、とても刺激的な動きですし、日本舞踊とは違うけれどもどこか共通するところもあるので、そうしたものも取り入れることができたらと思います。

勘十郎：うちの祖父は昔、電車のガタンゴトンという音でリズムを取って踊りを作ったのですが、六代目菊五郎がそれを聞いて、ご自分の家の隣は新聞社だからと、ガッチャンガッチャンという印刷機の音から『玉箒』という曲を作ったそうです。リズムというものは洋の東西を問わずどこにもあり、拾うか拾わないかは本人の力。僕らも行き詰まったら外のを観に行きます。それを古典の中でどう処理するかが一番難しいのですが、基本的に外のものを見たり聞いたりするのは絶対にいいですし、そういう意味ではぜひ色々なものから勉強してほしいですね。

——今後が益々楽しみです。まずはKAATでの舞台に注目ですね。

玉太郎：年齢的に、舞台に出る機会が少なくなっているのですが、今のうちにたくさんお稽古をしたいですし、今回の舞台では色々な方の期待に応えたいです。頑張ります。

鷹之資：踊りというのは何をやるにしても基礎が大切。素踊りがあって、それに衣裳をつけたらもっと大きくやらなければならないのが歌舞伎の踊りなので、素踊りができなければ舞台はできないと思っています。経験をたくさん積んで、これが日本の舞踊だ！というものを見ていただきたいです。

勘十郎：よく素踊りを“削ぎ落とす”と言いますが、祖父（二世藤間勘祖）は“削ぎ落とすのも大事だが、役の格・性根で勝負するんだ”と言っていたそうです。衣裳は着なくてもやせ細らず、その役に見えるのが素踊り。今回はそこに照明の工夫もし、古典の面白いところを色々取り入れながら、エンタテインメント性に富むカッコいい作品を作りたいと考えております。

【公演情報】

新作 清元・長唄

「葛城山蜘蛛絲譚」 (かつらぎやまちちゅうのよばなし) ～妖怪土蜘蛛退治～

■日程：2015年3月20日（金）19：00

3月21日（土）14：00◎／18：00

3月22日（日）14：00

■会場：KAAT 神奈川芸術劇場 <大スタジオ> 神奈川県横浜市中区山下町 281

■チケット：全席自由：4,500円（税込） ほか各種割引あり

■チケットかながわ 0570-015-415 <http://www.kaat.jp/>



ほか各種プレイガイドにて販売中